

SDGs 学生論文コンテスト

論文要旨

最優秀賞

岡山大学 大学院 ホアン ゴック ビックチャンさん

外国人技能実習生のための日本語教育に関する研究
—市民性形成とキャリア形成に焦点を当てて—



本稿は市民育成のための地域社会における日本語教育の原理と方法に関する理論的枠組みを構築し、具体的な提案をしようとするものである。その際、特に外国人技能実習生に対する日本語教育を対象として取り上げ、技能実習生のキャリア形成に焦点をあて、それに対して日本語教育がどのように役立つかを、先行研究の分析を通して理論的に考察していく。外国人技能実習生が直面している問題としては、地域社会に参加する市民を育成するための内容が組み込まれていないことによって、彼ら・彼女らのキャリア形成につながる学習が十分に保障されていないことが挙げられる。本稿では、市民育成と日本語教育の関連について考察した先行研究を分析し、外国人技能実習生が日本社会の中で個々の生き方を追求するにあたって、日本語教育がどのような役割を担うかを理論的に検討する。そのうえで、Share&Chill!の事例を考察するとともにそのための学習の場としての地域日本語教育の可能性と意義を探る。



論文要旨

最優秀賞 受賞インタビュー

——受賞したご感想をお聞かせください

コロナ禍で論文を発表する機会や他の学生や研究者と交流することが減り、このようなコンテストに参加する機会をいただき、ありがとうございました。技能実習生の話は辛い部分もあり、審査員のみなさんはどこまで受け入れてくれるか心配していましたが、あたたかいご助言、お言葉をいただき、今後も技能実習生に対する支援、研究を進める勇気をいただきました。

——今回このテーマを選定した理由、また解決策を導くまでに苦労した点をお聞かせください

私が技能実習生に関心を持ち始めたのは、技能実習生の司法通訳の仕事からです。失踪事件、不法滞在事件の通訳をしていた時、技能実習生が抱える問題、問題に対して声が上げられない状態に置かれていることを実感し、どうすれば技能実習生を支援することができるのかを研究し始めました。論文では技能実習生の問題を日本語教育の面から捉えましたが、制度そのものを根本的に変えていかないと解決しないのではと悩んだこともありました。論文を書くことにより、社会の一員として声を上げ、技能実習生の制度の見直しを実現するきっかけができるのではないかと考えました。

——今後どんな気持ちで SDGs に向き合うか、何か具体的な取り組みがあれば意気込みをお聞かせください

審査員の方々からのご助言を活かし、今後の研究や技能実習生に対する継続的な支援をどのように進めるべきか、もう一度考え直していきたいと思います。また、今回受賞した賞金を元に技能実習生のためのスピーチコンテストを行いたいと思っています。

SDGs 学生論文コンテスト

論文要旨

優秀賞

金城学院大学 吉田 光里さん

金融教育を学ぶ学生が加速させるリカレント教育
～大学生と社会人が学び合う「生活経済リテラシー
向上委員会」で質の高い教育をみんなに～



iDeCo という言葉をご存知だろうか。おそらく「名前からは分かりにくい」というのが率直な感想だろう。iDeCo をはじめとする年金制度やリスク管理といった金融知識は学生時代に学ぶ機会が無い一方で、社会人になると一層身近な存在として必要とされる内容と言えよう。次年度より高校家庭科にて必修化され、金融教育は一層関心が寄せられている。もちろん社会人になってから学ぶことも可能だが、日本では未だ「リカレント教育」に対して馴染みが薄い。学びたいのに今更質問するのは恥ずかしい。一定層の意欲的な人が集える場が無い現状に社会課題を感じ「学びに意欲的な社会人の力になりたい」と考えた。そこで私は SDGs 目標 4 番「質の高い教育をみんなに」と目標 8 番「働きがいも経済成長も」の達成を目指した活動として、学生と社会人が学び合える場「生活経済リテラシー向上委員会」を 0 から立ち上げた。これは持続可能な社会実現に向けた新しい教育のカタチだ。教職課程を履修した私なりの解決策であり、金融リテラシーを高めるうえで今後継続すべきであると自負する。生活経済学を学ぶ学生と自身の生活設計に役立てたい意欲的な社会人が学び合える場の実現で質の高い教育をみんなに。



SDGs 学生論文コンテスト

論文要旨

特別賞

慶應義塾大学 金 奎利さん

ヴィーガニズムの拡大と教育格差の緩和を目指す
「テンペケーション・プロジェクト」



最近、肉類消費からの環境負荷を減らすために菜食を実践する人々が増えているが、栄養価の高い植物性食品を手に入れるのは依然として容易でない。菜食を続けやすい社会的環境を作るため、肉類の代替品として注目されている「テンペ」の普及を図る。その中、発展途上国における地域・性別・経済力による教育格差を解消するため、インドネシア農村地域の女性生徒にテンペ関連の教育を提供する「テンペケーション・プロジェクト」を提案する。食品会社とのコラボレーションでテンペを用いた商品を開発し、その収益の一部を本プロジェクトに寄付する循環を生み、プロジェクトの長期化を図る。段階的にプロジェクトを広げていくことで、ヴィーガニズムの拡大による環境保護はもちろん発展途上国における教育格差の緩和まで成し遂げることができると期待する。



SDGs 学生論文コンテスト

論文要旨

特別賞

名古屋大学 大学院 伊神 裕人さん

自治体を原告とする気候変動訴訟の活用
—アメリカの裁判等からの示唆—



近年、人為的な累積 CO2 排出量と地球温暖化の関係は明確になっているが、自治体や国民の多くは自らの問題とはせず、中央政府に委ねている。闘って本当に調和した対策を生み出す必要があるので、気候変動対策の有力なアクターである自治体が気候変動訴訟を提起できるかを検討する。アメリカの州や自治体は気候変動訴訟で中央政府の対応を求めたり、CO2 排出企業に損害賠償等を請求したりしてきた。日本の自治体が提訴した気候変動訴訟は皆無である。日本の裁判所は自治体が提起できる訴訟の範囲を極めて限定し、財産権の主体となる訴訟だけを「法律上の争訟」としているため、この問題を取り上げたうえ、原告適格と事実的因果関係も分析した。そして、温暖化懐疑論を意図的に拡散させた企業の責任追及訴訟や住民訴訟の活用も検討した。自治体の訴訟提起では賛成住民と反対住民の対立が危惧されるし、事実的因果関係の問題は法的にクリアしにくいので、CO2 排出企業の内部情報開示を求めていき、その過程で温暖化懐疑論を意図的に拡散させた企業が判明した場合には CO2 排出を差止めたり、損害賠償請求したりする訴訟を提起するものとした。



SDGs 学生論文コンテスト

論文要旨

特別賞

立命館大学 川端 航平さん

関西学院大学 伊藤すみれさん

アフリカの教育問題と児童労働は同時に解決できる



私たちは SDGs 第4の目標である「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」を実現するための施策を考案した。とりわけ、アフリカ地域は3人に1人が教育にアクセスできておらず、児童労働を強いられている実情がある。「お金を稼ぐこと」と「教育を受けること」がトレードオフの関係になってしまっているのだ。そこで、アフリカの若者が地元をガイドとして案内する代わりに、対価としてツアー終了後チップに加えて、勉強を30分教えてもらうというサービスを提案した。これにより、「お金を稼ぐこと」と「教育を受けること」の両立を可能とした。さらに、外国人観光客との交流経験を積むことによってグローバルな人材育成にもつながり、地元企業のみならずアフリカへ進出する外資系企業にとっても魅力的な人材となり得る。私たちの提案はアフリカの若者、外国人観光客、企業に対して三方よしを実現するものである。

